

女子青年の性同一性に関する研究

松本 真理子

青年期における、発達課題のひとつとして、性同一性の形成をあげる研究者は、多い。とくに青年期女子においては「女性としての自己」に目覚め、それを受け容れていくことが、困難な課題となり易いという現代社会の状況があることが示されている。つまり、現代社会における、価値観の多様化、女性の社会的地位向上、観念的男女平等論、モノセックス時代といわれる男女の区別のあいまいさ、そして、核家族化に伴う母親役割の減少と女性就職率の増加等々により、従来の伝統的な性役割パターン——結婚、家事、出産、育児——だけには、おさまりにきれない女性が増え、しかし、かといって、新たな性役割パターンが確立されたわけでもなく「女性としての自己」のモデルを見い出せずに、さまざまな生き方の選択肢の中で、葛藤状態に陥る女子青年が増加していると考えられる。

ところで、「性同一性」という用語について、従来の研究ではこれに類する様々な用語が使われているが、これらの用語の概念は十分に明確にされているとはいえない。これは性のもつ領域の広さを物語るものであるが、ここではさしあたり、性同一性の概念を、明確化しておく必要がある。本研究では、性同一性を、エリクソンの自我同一性理論に沿って、捉えたいと思う。つまり、性同一性とは、自我同一性同様、生物学的、心理社会的構造の統合であり、幼児期からの様々な、心理社会的経験を通して、発達するものであり、又、それは、いったん確立されたとしても、常に、社会との関係の中で、変化し、修正されていくものと考えられる。とくに、女性においては「女性としての自己」の生き方が「人間としての自己」の生き方にいかに統合されていくかは、重要なテーマとなることが考えられる。すなわち、性同一性を「自我同一性発達過程の中で、さまざまな経験を通して、とくに対人関係の影響を受けながら次第に統合されていく女性（男性）としての自分にかかわる個人の、内的・外的体験、意識の一貫性、持続性、統一性であり、常に変化と修正の可能性を持つもの」と定義したい。さらに、本研究では、及川（1981）を参考にしてあらかじめ性同一性モデルを作成したが、この図示は省略せねばならない。

この性同一性モデルに沿って、女子青年の性同一性の

実態把握、及び、形成に関連する要因の検討を中心に、以下のⅠからⅢにわたる研究を行なった。

研究Ⅰ —調査法による研究—

目的：女子大学生における意識レベルでの性同一性の実態把握、および性質としての性役割、社会的性役割、対人的側面と性同一性との関連を捉えることを、目的とした。

方法：目的に沿った質問紙を作成し、予備調査により、内容妥当性、筆者の評定の信頼度を検討した後、本調査を集団実施した。被験者は女子学生（2～4年）103名、男子80名である。

結果：「もし、生まれ直すとしたら」の問いに、「男性」と答えた者は、全体の43.8%で、そのうち自由記述の内容より、女性であることに非受容的であると評定された者は、全体の25%であった（非受容群24人）。一方、受容群と評定された者は全体の30%（29人）であり、この両群を比較すると、自由記述の内容は、受容群は家庭志向的で、女性的であり、妻、母親の特性の肯定、または男性特性の否定のみであった。非受容群は、仕事志向的で、男性特性の肯定か、妻、母親の特性の否定のみというように、全く対照的なものであった。また、性役割との関連については、非受容群に「男性的女性」(masculinity)が多い傾向はみられたが、明らかな相関はなかった。対人的側面については、受容群の者は、母親をpositiveに、非受容群の者は、父親をpositiveに認知する傾向が、また、非受容群の者は、両親のいずれかから、男性的期待を受けていると認知する傾向が、みられ、従来のように、母親との関係のみでなく、家族内ダイナミックスの中から捉えることの必要性が示唆された。

研究Ⅱ —投映法による研究—

目的：より無意識的レベルにおける対人イメージ、パーソナリティと性同一性との関係を検討し、また、より内的、無意識的レベルでの性同一性のあり方を、個別解釈により検討することを目的とした。

方法：ロールシャッハテストを個別に実施し、限界検査として、父親、母親、自己、女性友人、一般的男性、一般的女性の各イメージ・カード、および好悪カードの

選択を行なった。被検者は、研究 I で、受容群とされた者11名と、非受容群13名である。

結果：パーソナリティに関しては、形式分析から、非受容群は、受容群に比して、有意にA%が高く、かつ、総反応数が少ないという結果が得られ、これは、非受容群の視野の狭さ、思考の固さを示唆するものとも考えられよう。又、情緒的側面に関して、非受容群は、不快感情、とくに hostility, aggression, anxiety が有意に多く表出され、一方、受容群では快感情が有意に多く表出されているという結果が得られた。

対人イメージに関しては、非受容群は父親、母親、一般男性、同性友人に対し、受容群に比べ、negative イメージ・カードとして選択する傾向がみられ、一方、自己イメージ・カードには、positive イメージ・カードを選択する傾向がみられた。ただし、その自己カードは「男性的」イメージ・カードであることが多かった。

以上の結果より、非受容群は、受容群に比べ、対人関係を中心として、対社会的葛藤が生じ易いことが、推測された。また、反応内容についても、非受容群は、有意に、phallic な男性的表象反応が多く、人間反応の性別も、男性の方が多い傾向がみられ、より無意識レベルでの、男根期的願望の存在が示唆された。

個別解釈による性同一性のあり方からは、受容、非受容といっても、個人によりさまざまな性同一性のあり方であることが示され、受容群では、性同一性形成型、母親同一視による早期完了型、偽受容型、エディプスコンプレックスの遷延型等がみられ、非受容群では、根深い性同一性葛藤型（男性化願望）、成熟拒否型、形成途上のあいまい型等がみられた。

研究 III —臨床的面接法による研究—

目的：idiographic な視点から生活史を通して、性同一性にかかわる要因を中心に、より深い性同一性理解を行なうことを目的とした。

方法：筆者の考案した臨床的面接法——面接の大枠のみを設定し、その中で女性としての自己との関係を中心に、自由に語ってもらう——を、定期的に原則として5回、1回1時間程度行ない、各面接後に3種のTST(男性、女性、私)、HTP、TATを行なった。被験者は研究IIの被験者のうちの受容群6名、非受容群6名である。

結果：まず、家族内力動について、両群に明らかな相

違が認められ、非受容群においては、母親はしつけが厳しいか放任主義で、何らかの主婦業以外の仕事を持ち、また、嫁—姑葛藤、あるいは、夫婦関係の悪さ等がみられ、暖かい家庭とはいえない。母親自身の女性であることの問題が、はっきりしている者もいた。父親は negative に語られるか、「女だから」というしつけ方をしたというイメージが強く、兄弟についても性による差別、劣等感、兄弟葛藤等がみられ、全体に、安定した家族内力動はみられず、各家族メンバーともに、被験者の性同一性には、negative な要因として働いているといえる。

一方、受容群では、母親は、優しいか、仲の良い positive な存在で、尊敬できる専業主婦である者が、6名中5名であった。父親も、優しく家庭を大切にする存在であり、男性=仕事=大変という図式で示された。兄弟葛藤は、語られず、非受容群に比べ、安定した家族を思わせる。非受容群は、6人中5人までが、3世代家族であるのに対し、受容群は、すべて核家族であったのも、興味深い結果であった。

次に、同性友人、異性関係についてであるが、非受容群では、友人関係の稀薄な者が多く、かつ、同性友人の存在を positive に認める者は1人だけであった。むしろ、男子と幼少期より遊ぶことが多く、中学から大学にかけて、女子よりも男子と話す方が楽しかったと述べる者が6名中5名であった。一方、受容群は同性友人を自分にとって重要な存在と認める者が5名、男子と話す方が楽しいと述べた者はいなかった。このように友人関係においても両群に顕著な差が認められ、家族同様、その影響の大きさがうかがわれる。

次に、自己像については、非受容群全員に強い劣等感と低い自己評価が認められ、「自分がわからない」としてアイデンティティに関する悩みを述べる者が多かった。とくに身体的劣等感の強いことが特徴であった。一方、受容群では、劣等感や自分のわからなさを述べる者はおらず、むしろ高い自己評価を持つ者もあり、身体的劣等感についても全く述べられることはなかった。

こうした結果から、女子青年の性同一性の形成には、自我同一性形成と家族関係のあり方、自己評価、身体性が深く関与していることが示された。

今後は、本研究を基礎として、更に、長期間の縦断的研究、及び、精神病理的側面からの女子青年の性同一性へのアプローチを行なっていきたい。